

古澤瑞希

1. 事業実施の目的

博士論文刊行のための調査として実施した。

2. 実施場所

佐賀県嬉野市

3. 実施期日

2025 年 7 月 21 日 (月) ～ 2025 年 8 月 18 日 (月)

4. 成果報告

●事業の概要

本研究の対象である北志田の浮立は、打面の直径が 24cm から 48.5cm の 4 種類の音高の異なる鉦（かね）と笛、モーラシと呼ばれる締太鼓、鉦打の大太鼓によって演奏されるアンサンブルを主とする芸能である。佐賀県嬉野市塩田町北志田地区の住民によって伝承されてきた。この芸能は 2017 年 11 月 3 日を最後に、祭りやイベントにおけるパフォーマンスが行われていない。北志田の浮立には、鉦や太鼓類がすべてのレパートリーをとおしで限られたリズムパターンを演奏するのに対し、笛だけは曲ごとに異なる旋律を演奏するという音楽的な特徴がある。また、笛奏者が、曲の開始やテンポの変化、終了の合図を出すことで、奉納の進行を司る役割もつとめるが、2017 年度の冬に、地区内唯一の笛奏者が 40 代で逝去した。以上の理由から、北志田の浮立は上演を行うことが難しくなっている状況にある。そして、2020 年からは世界的に新型コロナウイルスの流行がはじまったため、屋内に複数人で集まって行う鉦・太鼓などの打楽器類の練習が開催されなくなり、小学生を対象とした屋外における夏休みの笛の練習のみが行われている。北志田の浮立は現在、持続可能な伝承システムの模索を迫られている状況にある。本研究は、研究者自らが研究対象の音楽を学ぶという民族音楽学の手法を用いて、北志田の浮立が抱える課題を明らかにすることを目的としている。

浮立とは、佐賀県や長崎県を含む肥前地域を中心に分布している多様な芸能に用いられる呼称である。肥前地域の浮立には鉦を用いるものが多く、これは①直径 30cm～50cm 程度の 10～20 個の鉦を同じリズムで演奏する芸能と、②直径 15cm～80cm 程度の 3～8 種類の鉦をそれぞれ音高の異なるものとして扱い、組み合わせて演奏する芸能の 2 種類に大別できる。日本全国にも鉦を用いる芸能は数多くあるが、②の芸能は、ほとんど佐賀市以西にのみ分布し、珍しい芸能であるといえる。

報告者はこれまで、2020年から2024年にかけて、北志田地区において、聞き取り調査や小中学生を対象とした笛の練習での参与観察、地区の行事やイベントへの参加、北志田地区に隣接する南志田地区の笛奏者から笛の演奏の手ほどきを受けそれを北志田地区の子どもたちに伝えるなど、笛奏者の不在と新型コロナウイルス感染症の流行という状況のなか、実践的に伝承の過程にかかわりながら調査・研究を行ってきた。その結果、北志田の浮立は現在、「パフォーマンスの経験不足」「伝承者の非持続性」「伝承システムの再構築の必要性」という3つの課題を抱えていることが明らかになった。北志田の浮立の再開と、自身の博士論文出版に向けた加筆修正のために、北志田地区や南志田地区の住民と協力しながら、この課題の解決方法を探る必要がある。

本調査では、そのために、2025年7月22日から8月4日にかけて北志田公民館前の広場で行われた小学生向けの笛の練習、8月7日に北志田公民館で行われた北志田浮立保存会による北志田の浮立の練習、8月9日に北志田地区のお堂と呼ばれる場所で行われた「とおや」行事、8月17日に南志田地区の「観音さん」と呼ばれる場所で行われた浮立の奉納の参与観察を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業によって、北志田地区の住民とともに、地区内における浮立再開に向けた機運を高めることができた。子どもたちの笛の練習においては、笛の演奏の指導を行いつつ、子どもたちやその保護者の様子を観察した。指導の際には、笛の演奏を苦手とする子どもや、なかなか笛の音が出せない子どもを重点的に見て、彼らの、笛の演奏や浮立の伝承そのものに対するやる気が削がれないように気を配った。その結果、なかなか笛の音が出せず、練習初日には下級生から「こいつ吹けとらんやん」と揶揄されていた児童も、最終日ごろには「去年は最初のとこしか吹けんかったとに、今は真ん中まで吹ける」と保護者に報告するなど、自信を持った様子であった。

また、北志田浮立保存会の会長であり、今年度の北志田地区の区長でもある人物が「今年は9日のとおやで数珠まわしを復活させて、来年のお地蔵さんでは浮立を復活させようと思っている」という旨の発言をした際に、報告者は「できることなら今年のおおやでも浮立をやってみませんか」と提案した。結局、9日のとおやでは浮立の奉納は行われなかったが、7日に公民館において保存会による浮立の練習が行われることとなった。この練習は、2018年以来、はじめて北志田地区の大人たちが鉦の演奏を行う場となった。報告者はこの練習に笛奏者として参加した。報告者自身は、いち笛奏者として、南志田地区の浮立の奉納に参加した際に経験した曲目はうまく打楽器類と合わせることができたのに対し、奉納を経験したことのない曲目はなかなか合わせることが難しかったことから、パフォーマンスの場における演奏の経験の重要性を確認することができた。また、同じ地区の住民同士であっても、今回の練習の場が初対面であり、互いに自己紹介をしている場面もあった。そのうちひとりの職場が、佐賀県内の芸能で用いられる鉦を製造している東亜工機の社員であり、過去には

鉦を製造する部署にいたことがわかり、他の参加者が「鉦を作れる人間が地区にいるなんてすごい」という旨のことを述べていた。このことから、浮立の練習が地区の住民の交流の場として機能することが明らかになった。練習を経て、練習に参加した大人6人と子ども2人は、「やっぱり浮立はいいね」「来年は再開できそう」と口々に感想を述べていた。

とおやでは、保存会に属していない北志田地区の住民が「今年は浮立はしないのか」と周囲にたずねている場面があった。保存会の会長が「来年はやろうと思っている」と答えると、その住民は「やっぱり鉦がないと寂しい」と返していた。とおやの数珠まわしでは、浮立の二番鉦と呼ばれる二番目に小さい鉦を、お堂の中心に伏せて置き、打って用いた。報告者が北志田地区の調査を始めて以来、公民館以外の場所に鉦が運ばれたのはこのときが最初であった。

南志田地区の観音さんにおける浮立の奉納では、南志田地区の笛奏者の後ろで笛を演奏し、鉦や太鼓類との笛の合わせかたを学んだ。また、南志田地区の笛奏者にも、北志田の浮立の再開に向けての協力を要請する可能性があることを伝えた。

このようにして、本事業を通して、鉦浮立の再開に向けて、北志田地区が動き出している様子を見ることができた。このことは、博士論文を書籍として刊行する際に、加筆する予定である。

●本事業について

この事業により、経済的負担が軽くなり、フィールドに長期間滞在することが可能となった。大変重要な機会を得ることができたことにとても感謝している。今後もこの事業を継続していただきたいと心から願っている。